展 景

季 刊

No.75

September 2014

季刊　展景 75号

目次

蓮の花〈短歌〉……丸山弘子　4
パリの夏〈短歌〉……結城　文　6
消えぬ傷あと〈短歌〉……池田桂一　8
カサブランカ〈短歌〉……市川茂子　10
蟬声〈短歌〉……小野澤繁雄　12
箱根路　ドライブ・スルー〈短歌〉……河村郁子　14
米原万里忌〈俳句〉……新野祐子　16
パプリカ〈短歌〉……布宮慈子　18
東京歌会……20
近江気まぐれ文学抄 44　『今昔物語集――比叡の山の僧、虚空蔵の助けによりて智を得る語（巻第十七第三十三話）』……新関伸也　24
あるホームレス……松井淑子　30
〈那須通信 20〉山こうばし……加藤文子　32
〈鳥海山麓だより 10〉花を積もる……鈴木京子　36
対詠　ごきげんいかが？ PART 51……丸山／布宮／小野澤　40
前号作品短評A……42
前号作品短評B……44
エッセイ教室「清紫会」の作品より
棕櫚の木……小野澤繁雄　46
ブルーの目……丸山弘子　48
忘れられない人……市川茂子　50
「清紫会」だより……53
無二の会短信……54
編集後記……58

蓮の花

丸山弘子

今朝会ひて言葉かはせし人の家救急車ゐて長くとどまる

苦しまぬ最期なりしと聞きたるもひと夜の伽(とぎ)をさびしく思ふ

よき音色聞かせくれにきその妻の亡きあと尺八は吹かずなりしが

本堂の裏手に蓮の甕ならび七月半ば花盛りなり

蓮の花は四日が寿命昼すぎて一本がまづ散りはじめたり

亡き母と蓮の花見をしたることテレビの不忍池に思ふよ

底赤のむくげの若木庭くまにことしやうやく花ひとつ咲く

庭に舞ふナミノアゲハもクロアゲハも春より体大きく思ふ

この暑さ凌ぐ老い猫くろ土の地面にながなが腹這ひてをり

除湿器の水の処分に地下室へ急な階段のぼり下りする

パリの夏

結城　文

ヴィーナスよりモナリザよりも心震ふ翼張りてたつサモトラケのニケ
ゼウスおよび軍神アテネに従ひし勝利の女神は頭部をもたず
エッフェル塔見え五年ぶりのパリなりき朝のチュイルリー公園をゆく
はじめてのパリは三十年前か今また歩むカルチエ・ラタン

日本と同じ暑さの直射日にシャツを開きて日を浴む若者
マロニエの実は青くして錆色になりそむ葉むらのなかに際立つ
八月のシャンゼリゼ通りにあふるるはパリっ子ならぬ人のみ多し
独り立ちせし娘らとゆく旅よ死ににし夫のあまたたび来つ
われを越しゆきたる子らを嬉しみてその高き背を見つつ歩みぬ
くがたちの湯のごとくたぎつ怒りとはいはねど結ひぬひそかなる標(しめ)

消えぬ傷あと

池田桂一

幾度の震災にも耐えきたる蔵一つは百四十四年経て建つ

あと七年経てば母屋は百年となるこの震災に雨漏り始む

味噌蔵の屋根は青空突き抜けて年毎広がる穴のみ残し

陶芸と木工の蔵にと夢見しも震災は石垣を脆くも崩しぬ

大雨の予報に戦(おのの)くこの日ごろ直さぬ屋根の雨漏り続き

雨漏りの音のしばらく止みており当りし天気予報に和む

裏座敷に地割れは残り抜け落ちし床の間の修理ようやく終えぬ

我が誕生祝いて植えしとう洋胡桃見るたび浮かぶ亡父の言葉が

長々と四肢投げだして寝る猫は瓦礫の上を居場所と決めて

災害は忘れた頃にやってくるテレビは映す他人事として

カサブランカ

市川茂子

よどみなき電話の声にあいづちを打つばかりにて三十分経つ
雨音も知らずねむりて一夜明け物干竿にしずく連なる
西空に雨雲湧きて茜色ふち取りながら広がりてゆく
雨台風通り過ぎたる今朝の庭風にもまれてカサブランカ咲く

勝てという声援にゆれるサッカー場終了の笛に息のむ一瞬
細胞のとけゆくほどの暑き日よ昼餉の後は睡魔が襲う
花火草のこぼれし種がまた生えて抜くには惜しく水やりをする
其処ここにある花火草のあえかにてかすかな風の夕べ涼呼ぶ
向い家のサルスベリ咲くわが窓に借景となる花房ゆれて
わがもてるほむらを空に放ちたし大輪の花火を画面に見つつ

蟬　声

小野澤繁雄

足し砂か余り砂かな思いいし砂場のすみに今日も眼に止む

この朝を日は隠れ隠れしているか小さなお家に匂うバラ垣

下沼は水が抜かれて干上がりし底まで出ててこどもら遊ぶ

そのどこにいきつくとなく救急車あたり響かせてそのうち止みぬ

大きくは下がりてゆかぬ温度差に苦しくわずか朝を眠りぬ

蟬声（せんせい）が朝の朝から身をつつむ声々はまた夏を思い返して

なつかしきものでもあるかそのうちに暑さなべてを荒れさせるもの

つらつらとめざめいる間を一本の樹を育ていき暁闇に

蟬声がまたつよくなる朝々の歩みはここで林にかかる

花の終わりはひとしなみ穂の先をみな黒くしてならぶ一つら

箱根路　ドライブ・スルー

河村郁子

湯本より上り坂なる天下の嶮　篠つく雨にワイパー忙(せは)し

宮の下あたりの峡のまなかひに竹林のみがかそかに揺れる

万緑の箱根路深き樹樹なべて豪雨受けとめる仁王立つごと

関所への杉並木打つ雨音を江戸の旅人(たびと)らいかに聞きしや

小止みして〈芦ノ湖テラス〉にピッツァ食む湖面の茫洋安らぎとして

音高く雲間に開きし芦ノ湖の花火愛でたるちちはは在りき

梅霖にけぶる湖の面に現はるる遊覧船　白　ふうはりと白

紫陽花の咲き残りたる群青に梅雨明け近き雨降りやまぬ

一度のみ車を降りて傘差して五十歩ほどを歩きし箱根

濃き霧のなかの運転甥まかせ今宵の宿の熱海へ向かふ

米原万里忌

憧憬の高さにそよぎ朴の花
犬とゐて米原万里忌雲奔(はし)る
草鞋解けば仄かに灯る黴の宿
短夜の鈍器は利器となりて落つ

新野(にいの)祐子

雲の影山にくつろぐ梅雨晴間
白南風(しろはえ)や鉛筆で書く闘争史
斑鳩(いかる)鳴く虚空蔵尊とふ宇宙より
雷やギリシャ喜悲劇幕上がる
ソーダ水風よく通る壮年期
駒鳥の歩荷(ぼっか)励ましゐたりけり

パプリカ

布宮慈子（やすこ）

直に聴くアーサー・ビナードのことば身の裡（うち）しづかにバグ修正す

米海軍のアクロバット飛行隊ブルーエンジェルス→ブルーインパルス

ブルーインパルスは飛びぬ山形の空　六魂祭（ろくこんさい）とふが順繰りにきて

ボリビアを恋うて恋うて戻りたる三浦光（みつ）は鶴岡のひと

光さんはラパスの街を歩くだらう詩人として空青き高地を

へぼ胡瓜まがり茄子さへいとほしよ隣り家のねこ横目にて過ぐ

茄子胡瓜スイカもらひて帰る道すすきの穂さき残光に照る

みどりなす水耕栽培ベランダのアイコとペペのトマトの林

勢力を広げるやうにゆつくりと赤みを帯びてゆくパプリカ

オレンヂのパプリカ何を思ふかな日ごと色づく空（うろ）をかかへて

東京歌会（第二十二回）

平成二十六年七月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は、各二首十四首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。エッセイが三篇と少なく、時間的に短歌を詳しく読むことができた。

・向うビルに一羽の鴉止まりおりわれの姿を飽かず眺むる　　大石久美

鴉との距離感が都会では独特で、やや直接的か。向う岸に比べて「向うビル」はなじまない。われは受身。

・雨台風通り過ぎたる今朝の庭風にもまれて白百合の咲く　　市川茂子

朝になって庭に目が向いた。風が残っていて、白百合を揺らしている。じつは、白百合でなくカサブランカだという。皆、カサブランカの方がよいという。次の歌とセットで。「雨音も知らずねむりし一夜明け物干竿にしずく連なる」。こちら、「ねむりて」としたいと。

・如何ほどの人の祈念を刻みしや縁（ふち）の崩れし石段のぼる　　林　博子

神社かお寺か。下句の表現がいきとどいている。「如何ほどの」「祈念」について声が出された。「祈念」は、祈り（禱り）とした方がよいとも。

・図書館のホールに飾りたんざくの「しあわせになる。」は宣言型か　　小野澤繁雄

何か習いごとの上達をお願いするといったものでなく、「しあわせになる。」という言明が面白いと。「飾りたんざくの」のつながりは考慮すべき。

・路中にバリケードあり行き止まる人ら数増し消火後の道　　池田桂一

切れ切れ、になってしまった。「路中に」が要らない。バリケードありて、から始め

た方がよいと。「人ら数増し」には時間的経過がある。数増しゆきぬ、としたい。情景は面白い。

・駐車場の屋根に平たく枝広げ藤は花房横たへしまま　　丸山弘子

藤は支え方でいろいろに広がるようだ。場所柄、花房も横倒しにならざるをえないところ。よく詠んでいる。

・辞書引くに小さき虫の乗りてきて閉ぢられぬまま虫と遊べり　　布宮慈子

上句、やや説明的か。「ひらきたる辞書に小さき虫のきて」くらいかと。虫と遊べり、この内容は次の歌、「しばらくを虫のこころになりてみん一夜が虫の一生として」。

（小野澤繁雄）

『今昔物語集――比叡の山の僧、虚空蔵の助けによりて智を得る語（巻第十七第三十三話）』

新関伸也

「今昔、比叡の山に若き僧有けり。出家してより後、学問の志は有と云えども、遊び戯に心を入れて、学問する事無し。…」ではじまる『今昔物語集 巻第十七第三十三話』の話の筋はこうである。

昔、比叡山にある青年僧がいた。彼は学問に関心はあるが、根が遊び好きであるため、法華経しか知らなかった。ただ、嵯峨の法輪寺の虚空蔵菩薩にだけは、お参りを欠かさないでいた。

秋も暮れたある日のこと、いつものように法輪寺に詣でた後、寺の知り合いと話し込んで、日が暮れて夜となってしまった。帰路、りっぱな門構えの屋敷で一夜の宿を願い出たところ、快く引き受けてくれ、応接間に通されて酒食を振る舞われる。夜更けとなり僧は寝付けなかったため、屋敷を徘徊していたら、明かりが漏れている部屋があった。雨戸にあいた穴から中を覗くと、若く美しい女主人が横になって本を読んでいた。顔も体も震いつきたくなるほどの美女だったので、我慢できずに僧は、夜這いを敢行する。

忍び込んできた僧に対して、女主人は着物をはだけることもなく落ち着いていた。夫を前の年に亡くしたばかりであったが、求婚する男はたくさんいても、普通の男と結婚するつもりはないために一人でいたのである。女主人は、僧侶であればこそ泊まってもらったと言い、「法華経を暗記していますか」と問を投げかけた。それに対して僧は、経は習っているが、遊びほうけたため諳んじられないと白状する。すると女主人は、諳んじられるようになってからここへ来たら、望みを叶えてあげると、比叡に朝、送り出す。

僧は比叡に戻り、経を暗記するなど猛勉強を二十日間重ね、女主人のもとを再び訪ねて、夜にその思いを果たそうとする。しかし、彼女は経を暗唱できる程度では、二人の関係は長続きしないので、私を本当に思っているのなら、三年ほど比叡に籠もって正式な学僧になるまで勉強に励んでから、契りを結びましょうと言う。その間も文通は欠かさないし、経済的な援助も十二分にすると申し出た。

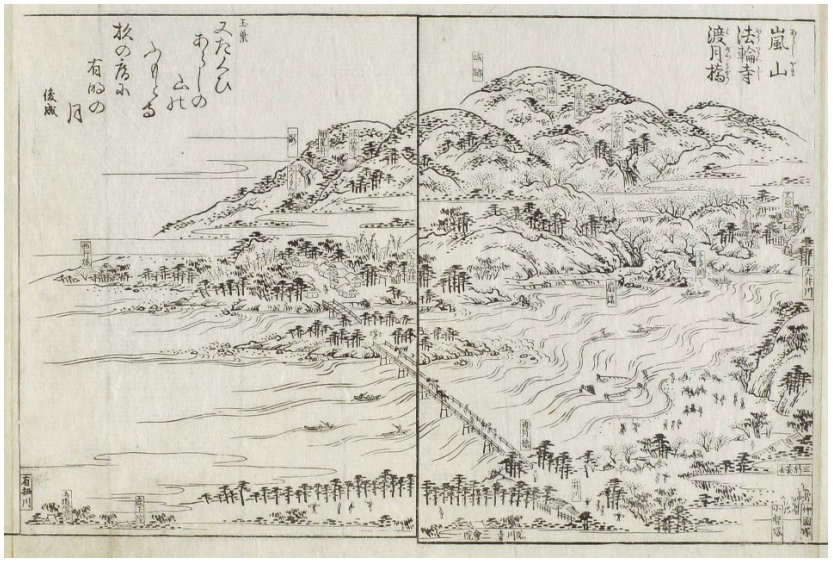
僧は、それに従い、逢いたい気持ちを抑えつつ、三年間ひたすら学問に励み、山でも名の知れた学僧となる。法輪寺に詣でた帰りに、また女主人を訪ねる。几帳越しに経典の疑問を問いかけられ

ると僧は完璧な解答を返し、女主人を驚かす。また女主人といえども仏道に詳しく、大いに僧は感謝するのであった。夜更けとなり、ついに念願が叶い、女主人の傍らに身を寄せることができた。腕をまわし添い寝しながら、語っている間に、つい気が緩んでいつの間にか寝こんでしまった。

ふと目が覚めてみるとそこは、ススキの生い茂った野原であるばかりか、寒い季節であり、訳もわからずとにかく法輪寺に行くことにした。お堂で祈っているうちに、寝入ってしまい、夢をみる。

夢の中で御帳(みちょう)から小僧が現れ、狐や狸がだましたのではなく、自分がだましたことを告げられる。才能はあっても、怠けて遊びに夢中になり、学問をおろそかにしているのに、いつも私のところへ来て、都合のよい願い事をしてせがんでいた。思案ののち、女好きの性癖を利用して、悟りを開く方法を考えて、戒めたのであった。法輪寺の虚空蔵菩薩が、まさに女主人に身を変えていたのである。自分の非を悔い改め、比叡に戻り学問に励み、学僧としての評価はいよいよ高くなっていったということである。

このような説話であるが、虚空のような無限の知恵や功徳を蔵し、僧俗貴賤から学芸向上祈願で信仰を集めたのが法輪寺「虚空蔵菩薩」である。まさにこの菩薩の化身が「女主人」で、また菩薩が使わしたのが夢枕の「小僧」であった。比叡山で修行の身でありながら、遊び好きの青年僧を色仕掛によって奮起させ、やがて本物の学僧に仕上げた逸話である。



《法輪寺 図絵》『都名所図会』日本国際文化センター
http://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/kyoto/page7/km_01_282.html

この説話を読み解くに、人間において色欲は子孫を残す根源的、生理的欲求であり、男性の欲求は、女性以上に本能ですらある。仏道における性的欲求は、煩悩であり、徹底した抑圧と昇華によって悟りへと転回する荒行が宗教上形成されていく。しかし、この煩悩、つまり欲望は、人間の行動の在り方を方向付ける動機や目的となる存在でもある。財欲、色欲、飲食欲、名誉欲、睡眠欲の仏教「五欲」で、色欲は特に異性をわがものにする強烈なエネルギー源となる。

説話で青年僧は、若い女主人に認められ、好かれ、やがてわがものにし、一体化したいという欲求を契機に学問に没頭していくのである。ある意味、手段が目的に変化していく逸話とも解釈できるだろう。

ところで釈迦は相手の素質に合わせた「対機話法」で教えを説いたが、敷衍（ふえん）すれば人間のタイプに応じて素質を伸ばす契機があれば、プラスの方向に転じることを一方で暗示している。だが、そこにはよき導き手がいることが条件である。人間を育てる上で、一方的にこちらの教えを押しつけるだけでなく、相手の資質に合わせて教えを説くことの大切さを暗示している。平安の代でも、現在でも人間の心の有り様は、変わるものでないことを今昔物語は教えてくれている。まさに、古典の魅力とも言っていいだろう。

さて、この説話の出典である『今昔物語集』は、平安末期の十二世紀初めに成立した説話集である。全三十一巻で欠巻もあるが、仏典、漢籍、『日本霊異記』『三宝絵』など、内外の仏教書、説話集から収集したものであり、さまざまな階層の人々が登場するおもしろみがあり、説話集としては、わが国で最大のものである。天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）の三部構成から成り、千余話が語られる。これらは因果応報譚などの仏教説話から始まり、諸々の物話が続くかたちをとる。作者は未詳で、源隆国、鳥羽僧正、大寺の無名の書記説など定かではない。いずれも「今は昔」という書き出しで始まり、「トナム語リ傳ヘタルトヤ」という結びの句で終わっていることで、今昔物語の由来となっている。

近代文学では、芥川龍之介がこの物語集から着想を得て「羅生門」「鼻」「芋粥」などの名作を著しているほか、谷崎潤一郎や海音寺潮五郎、丹羽文雄なども小説のネタを得て、親しんでいる。

あるホームレス

松井淑子

近くの大きな三叉路（さんさろ）には立体交差用の陸橋がかかっていて、その橋脚は、道路の路面より一段高いところに、フェンスに囲まれて立っている。

その橋脚の根元、フェンスの外側の、路面より一段高いとはいえごく狭いスペースに、しばらく前から広げた段ボール箱、折り畳んだ毛布、ビニール傘、その他生活用品らしい物を詰めこんだ大きな紙袋やレジ袋などが置かれるようになった。

どうやらホームレスが住みついたらしい。すぐ側には横断歩道があり、昼間はけっこう人通りがあるが、それさえ気にしなければ陸橋の下だから風雨にさらされる心配がない。おまけに近くに公園があるから、飲み水や手洗いはそこのものを利用できる。うまい場所を選んだものだと感心した。

置かれている品物は日によって少しずつ異なり、ある日はきれいに洗ったプラスチックの食器や飲み残しのお茶が入ったペットボトル、またある日は洗濯したらしいソックスや肌着が洗濯ばさみでフェンスに留められていたりする。

ずいぶん奇麗好きなホームレスがいたものだ。そう思っていたが、ついぞ姿を見たことはなかった。

それが先日、たまたまそこを通りかかると、男が一人、段ボールに腰を下ろして熱心に本を読んでいるのに気がついた。件（くだん）のホームレスらしい。白のTシャツに古びたズボン姿で、年のころはよくわからないが、伸びかけた鬚（ひげ）も髪の毛も黒ぐろとしていて壮年といった感じである。傍らには書店名入りの紙カバーがかかった本が二、三冊重ねてあった。紙カバーが新しそうなところを見ると、拾ったものでももらったものでもない、自分で買ったものかもしれない。

ホームレスが本を読むとは、それも買ってまでも読むとは、と私は一瞬ひどく驚いた。

と同時に、ホームレスという言葉が呼び起こすイメージに捕われ、ホームレスは落ちこぼれた人たち、本など読まない人たち、と十把ひとからげに思いこんでいる自分自身に気がついて、二度びっくりしてしまった。

ホームレスだって読書好きもいれば音楽好きもいて当然である。私の記憶違いでなければ、ホームレス生活を経験し、その経験を書くことで作家になっていた人がたしかにいたように思う。

いま目の前にいるホームレスだっていつそうならないとは限らない。この人はこれからどうなっていくのだろうか。読書する姿を眺めながら、私は思わず想像をたくましくしてしまった。

〈那須通信20〉

山こうばし

加藤文子

君は私と出合うまで、長いこと盆栽村の由緒ある盆栽園で育てられていた。
初めて君のいる棚の前に立った時の私の気持ちを、覚えてくれているだろうか。
すーっと上方に枝を伸ばし、その上品な立ち姿は、私をふと立ち止まらせたのだ。
その瞬間、〝たしなみ〟という言葉が見えたような気がした。
二十代の私には思いきらないと買うことのできない盆栽だったけど、その決断のときのことも知っているネ。
長年、大切に育てられてきた盆栽を私が引き継がせてもらっていいものだろうか。
値段のことよりも、なによりも、そんな不安が心をよぎったのだ。
でも、毎日君をみていたいという気持ちの方が強くて、ゆずり受けた。
それから間もなく、私は余儀なく独立することになった。

数少なではあったけど、松やいくつかの盆栽と一緒に、私の始めたささやかな盆栽園の棚に、君も並んだ。

見通しなど何もなかったけれど、始められた幸せに満たされたその日の私の晴れた心を知っているはず。

ある時、撮影で厳寒期の山中湖へ写真家のＩさんと出かけたこともあった。

雪の積もる凍った湖の上で、シャッターがきられたのだ。

その日の姿はモノクロームのポストカードに残っている。今思えば、とてもぜいたくな撮影だった。君を撮るために遠出したのだもの。君には、そうさせてしまう不思議な魅力があったのだと思う。

君は訪れた人々のささやきを聞き、幾百幾千もの私を見てきたんだ。

君のいい知れぬたたずまいに私はたしなめられる。庭の長老の君。

厳寒の山中湖で…

1982 年頃　岩瀬陽一氏撮影

秋の温室風景

中央には今年も元気な山こうばしの姿がある。
高さ 90 センチ樹齢 50 年以上

2014 年　加藤文子撮影

〈鳥海山麓だより10〉

花を積もる

鈴木京子

エル・ニーニョだとか、長梅雨だとか、冷夏だとか、そんな春先の長期予報に反して、今年は雨が少ないカラカラの暑い夏になった。

メロンの収穫時期が例年より十日前後早まり、七月のうちに出荷が終了した。収穫直前に地域まるごと全滅した昨年を思い、「ありがでのぉ」とお天気様に感謝する。でもネ、人間様はどうしても「欲たかり（欲が深い）」だから、頭の片隅でそろばんをはじき、心の奥底で「ちぇっ」と舌打ちしてしまう。一番値段が高くなるお盆直前に、もう何も出荷できなかったから。

それでも、メロンの場合は「売り切った」のだからよかった。気の毒だったのは、お盆用の花を出している農家だ。

今年も盆前の五日間、いつもの農家に花を「積もり」に行った。この地域では、お盆に仏壇や墓前に供える花束を「積もり花」と呼ぶ。

そこは花の専門農家ではなく、八十代のユミコさん、その息子で五十代のマサハルさんと妻のテルコさんの三人が、水田と畑作をしている専業農家。お盆には隣近所や親戚などから注文を受け、三百以上の積もり花をつくる。

ユミコさんとテルコさんは、自ら栽培したコメや野菜を、まずは生鮮で、次に笹巻きや餅などの郷土食、そして漬け物や乾燥野菜などの保存食に加工し、道の駅などで売っている。農民としての心と手業を持ったほんものの「百姓おんな」だ。

そのユミコさんとテルコさんが、春先から手をかけてきた花なのに、一本菊は大部分がお盆を待たずに咲いてしまい、小菊は直前の猛暑でつぼみごと茶色に「日焼け」していた。このまま世の中に出ることなくいずれ潰され、不足分は市場で仕入れなければならない。

「アンタ、畑、見ておいでよ。かわいそうだよォ、奇麗に咲いたのにねェ、誰にも見てもらえずうだられる（捨てられる）んだよ。でも、あれじゃァね、お盆本番にはアタシになっちゃうからさ、ババァはさ、ダメでしょ？」

毎年手伝いに来ている、ユミコさんより年上のカネコさんが言う。カネコさんは二十数年間、「東京」で働いていたから「標準語」で話す。

積もり花は、斑点入りのススキを背骨のように立て、その手前に様々な種類の菊、色鮮やかなケイトウ、トルコキキョウなどを「積もって」つくる。特に、濃紺やエンジ色で豪華な見栄えの「朝

鮮菊」は欠かせない。他の菊に比べ、栽培に手間がかからず水揚げ処理の必要もないこの花のことを、「チョウセンは強いからエライよね、テルコさんに楽させるからさ。花のチョウセンはいいのにね、北朝鮮はダメだ」と、毎年カネコさんは言う。

「ススキとみそ萩が入れば、あとはセンスで積もれ」と言われるが、茨城の実家でも、同居人の実家の函館でも見たことのない独特の「様式美」を持っていて、三年目だけれどなかなかうまくも、早くもならない……。

今年は春先からの天候がよくて、ハーブから夏野菜まで、たくさん収穫できた。
カモミール、青山椒、梅干し、きゅうり、なす、トマトが過去最高の量と質。
きゅうりとなすは1日おきに浅漬けにして食べたほか、長期保存漬けに。

インゲン、ミニトマト、きゅうり、青唐辛子はピクルスに。
これから、みょうが、エゴマの葉、シソの実を保存食にする。

左中の画像は乾燥中のレモングラス。

Photo : Suzuki Kyoko

対詠　ごきげんいかが？　PART 51　〈2014〉

O　丸山　弘子
N　布宮　慈子
M　小野澤繁雄

むすうにも星がまたたくようにしてドクダミの花水路深くに　6月24日　O

マンションのめぐり木立のヤマボウシ総苞（そうほう）を紅に染めて咲きつぐ　6月29日　M

ツーリングに来たる知人を案内す蔵のかたはら紅花咲けり　7月3日　N

なつかしき花のひとつか胡瓜垂れ間に幾つあたたかき色に　7月5日　O

窓下のアガパンサスが咲きました三十六本横一列に　7月10日　M

紅花の種をまきたるひとところ花つけてをり枝を伸ばして　7月15日　N

よりかかりくる傾きに百日紅は花房重しつゆ雨の間を　7月20日　O

校庭と歩道のすき間はやばやと白さるすべり輝き放つ　7月27日　M

山の辺を行けば合ひたり輝きてゐるやうに咲く合歓の花群　8月2日　N

いかにもな夏の花なれ枝先を重くするとなくムクゲ咲きいて　8月9日　O

狭庭べをひとめぐりして木戸にをりことし最初のシオカラトンボ　8月15日　M

お悔やみを言ひ終へてのち玄関の鳥と目が合ふ山雀（やまがら）らしも　8月21日　N

余りにも小さくかぼそき脚をもつ犬も飼われて抱かれてすぎぬ　8月24日　O

その兄の死を告げさびしと電話ありつねは弱みを見せぬ従兄の　9月3日　M

カッペリーニ季の過ぎゆくをさびしめば「カペッリーニ」とぞ極細パスタ　9月5日　N

しんとして蟬の声のみ下野本村（しものもとむら）の名残りのみちの曲折　9月10日　O

叔父の葬すぎて彼岸となりにけり菊花を持ちて空にかざさむ　9月20日　N

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●娘（こ）を西へ逃がしたるのち出羽へ行かむ越後回りのルートと決めて　布宮慈子

次の歌、その次の歌の詩人は同一人物だろうか。「ひたひた」と「迫りきてゐる」何か。

せんさうへ行きし故郷の詩人あり雪どけ水は流る　ひたひた

なにものか迫りきてゐる馬見（まみ）ケ崎（がさき）川は詩人のごと寡黙なり

とり上げた歌では、そのときと云っていいそのときの切実さが直接に伝わってくる。やすやすと越境されて、出羽が残った。東西がもってしまった分断。一連に読むべきは驚きと怒りか「三年ののち鮮やかな朧（おぼろ）げな記憶」と作者は云っていて、それを「やうやく取りだしてみる」ともいう。

●やうやくに役を解かれて町内の帳簿戻しぬ四月末日　丸山弘子

一読、町内会の何か役回りを、それは会計だろうか、一年間何かやったのだということが判る。年度の締めのようなことも、大体四月も末になれば終わるのだろう。初句で、そういうことが何ほどかの負担だったこともしれる。ほっとしたそこに活動費のようなものもとどいたということが、この前の歌、

前年度の活動費といひ町内の役を辞したるわれにも届く

ほかに歌は身近く花など、なかに姉妹というありかたのひとつがこの歌に。

五年後のわが姿ならん約束の改札口にあらはれし姉の

●言葉とふ森に鳥らは美しき調べ歌はずただ風の音　結城　文

何か決定的な時間がすぎてしまったのか。ただ風の音がすると言葉の不在感が強調される。前のこの歌「日は翳り雪の峰燃ゆ鉄扉（てつぴ）ひらき背後に足音の遠ざかりゆく」では、どうしてか足音が呼び出されてしまった。

桜咲き欅芽ぐみて窓の景日々移りゆく華やぎにゐる

季の華やぎも日々の窓の景として終始するしかなく、そこには外部性が漂っている。母の夢の記憶の欠落感、ともそれは繋がっている。

母の夢見しかどいかなる夢なりし記憶なきこと醒めてかなしき

●セリ摘めば何するものと子供らの集まり来たる道近きあぜ　池田桂一

さいしょの歌の（駅名を声そろえつつ読む）「児ら」、次の歌の（半身伸ばして眠る）「仔犬」、その次の歌の（鳴り止まぬ拍手の中を巣立ちゆく）「子等」いずれも、身に近い子供たち、仔犬の歌で、よい雰囲気がある。

この歌では、子供らとの何か関わりが、作者との間のそれが距離を詰めて感じられる。なかにこんな歌も、作者の福島での独りぐらしということも考えてみた。

人づてに聞くのみにして師の病見舞うことなく過ぎしを悔いぬ

前号作品短評B〈慈子〉

●満開の桜とブルーの空の色四月のカレンダーに花見している　市川茂子

カレンダーの桜とは、それこそ青い空の下に咲いた一番いい時期の花。家での花見、いわば心のなかでの花見なのだが、不思議と暗さはない。自分の姿を写実的にとらえているからであろう。次の歌も、無理をせず、自然の摂理のなかで生きていこうとする気持ちが感じられる一首。

見逃した桜はまた咲く老いの身をいたわりながら静かに待たん

冬空の晴れわたる朝工事場にオレンジ色のアームが伸びる

最初に置かれた冬空の歌は、冬の澄みきった空気と、クレーンだろうか、オレンジ色のアームが大胆に描かれている。ただ、音を合わせるための「工事場」という言い方が少し残念。

●一六〇センチの背丈にしては高いかな机、椅子とも八雲書斎に　小野澤繁雄

島根と鳥取、来訪時の歌。根雨（ねう）、足立（あしだち）など、難読の駅名が入る歌のほか、松江に住んだ小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）についての詳細な歌があり、これがやはり興味をひく。なぜ机が高いのだろうか？　小泉八雲記念館の説明では「眼が極度に悪かったため丈の高い机を特注して用いた」とある。十六歳のときのけがで左目を失明していたため、高さのある机を使い紙を目に近づけて執筆していたのだという。次も、八雲の生活ぶりをうかがわせる歌。

鉄亜鈴つかいし八雲「最小の時間で最大の運動量得たし」と

●下半身の七〇％の血液を押し上げくるるは脹脛（ふくらはぎ）とぞ　河村郁子

「身体は偉い」と題する一連。作者は外出中に急に足が動かなくなり、通りかかった車に頼んで帰宅したようだ。自分で検索して、売れ筋の本『ふくらはぎをもみなさい』を注文。掲出歌のように、脹脛のはたらきを実感したことなどが時系列でうたわれている。しかし、作者のすごいところは次の歌だ。

すぐさまに同年輩氏に知らせたく会報に載せるエッセイとする

具合のわるくなった身体さえも冷静に的確に判断して作品とする、その姿勢に驚かされる。

●春待つ撫（ぶな）滑落止めてくれにけり　新野祐子

山に登って滑落しそうになったときにブナに救われたのだ。まだ雪の残る季節である。春を待っているブナという擬人化も、作者がブナを信頼していると感じさせる表現。戦後、ブナ林は大規模に伐採されてしまったというが、保水力の面でも見直されてよい木である。

海市（かいし）より爆音響く諸島とぞ

海市は蜃気楼のことで、春の季語。沖縄を訪ねたときの作であろう。美しい海に囲まれたところだが、爆音が響くという現実。沖縄はいま米軍基地の移設問題があり、辺野古周辺で緊張が続いている。沖縄諸島の哀しみを表現した句。

エッセイ教室「清紫会」の作品より

棕櫚の木

小野澤繁雄

棕櫚の木は、注意していれば、町のあちこちで見ることができる。多くは庭木だ。

川土手の中腹といっていい場所でみることがあったが、なにか場違いの感じがした。この木は通りからみて大体に玄関先に植わっていることが多い。

その数だが、一本もあれば、二本、三本もある。二、三本が多いだろうか。密植されているが、その高さは揃っていないことが多い。装飾樹と云われるらしい。

ボクの印象では医院の玄関先、洋館に合っているようだ。今日、町で三本を玄関先に見たのは会計士事務所だった。合いやすいのは今の建物でなく、少し古い建物だろう。こういう木にもはやりすたりはある。

故郷の家の庭にはかつて築山があり、そこには棕櫚と松とキンモクセイがあった。古い記憶では、

一角にキツネの小社もあり、キツネは一点紅を刷いていたようだった。

とにかく大きな葉で、遊びにつかうことができた。

普通でない木で、この木の存在が、そこの空気感を独特にするようだ。それで、過去にこんな歌をかいたことがある。

棕櫚の木の一つが頭を出していてその家の感じを何と言おうか

六月中旬の土日、伊良湖崎吟行合宿というのに混ぜてもらった。結社の名古屋歌会の人たちに誘われたもので、幸いお天気にめぐまれた。

豊橋から宿のバスで一時間余り、伊良湖崎にいよいよ近づくと、片並木状に、棕櫚のような木が続いていた。丈が大きい、堂々とした木だ。何の木だろうといろいろ声が上がった。さすがに伊良湖崎だからヤシかな、という声もある。メンバーのひとりの断定する声で、フェニックスということがしれた。

ところで、ながれついたのはヤシの実でヤシの木ではなかったのだ。宿の人も不明瞭で、ヤシはないようだった。あとでしったことだが、棕櫚はヤシ目ヤシ科ヤシ属の総称らしい。

ブルーの目

丸山弘子

六月半ば、近くのスーパー「なかのとうきゅう」が、閉店というのか撤退した。

このスーパーが特別好き、というわけではなかったが、近いので、とにかく長い間利用し、重宝していた。

今度はイトーヨーカ堂になるというから、しばらくの間辛抱していれば、今までと同じになるだろう。

私の住んでいるこの辺りは便利なところで、スーパーも西友ありピーコックあり、また、ライフもある。とうきゅうがなくなったからといって、困るわけではないが、とにかく近いのが何よりだったのである。

それに、同じビルに書店があり、喫茶店や安い衣料品店その他が入っていて、時間つぶしをするところがあったが、そちらの方ともしばらくお別れだ。

今のところライフへ行くことが多い。とうきゅうへはわが家から南方向だったが、今度は北方向へ行くことになった。家から北へは住宅地を通ってゆく。どこの家にも庭があり、それぞれガーデニングを楽しんでいる。とにかく秋までのことになるが、どんな花に会えるかと楽しみにしている。

それより猫が面白い。猫を飼っている家が何軒かあり、表に出てくるのである。しかし最近は子猫は見かけず、年寄り猫が多い。猫も人間社会に似てきたようだ。

そのうちの一匹、キジトラというのだろうか、ブロック塀の上でゆうゆうと毛づくろいしていた。ニャーと挨拶をして傍に寄り、背中をなでさせてもらう。かなり友好的な猫でいやがらない。しばらくして塀をおりてゆくから、サヨナラかなと思ったら傍に寄ってきて、体をすり寄せてきた。家の人に可愛がられているな、とうれしくなった。

別の日、今度は白い猫（ずい分うす汚れている）が、やはり毛づくろいしているので、近づくとこの猫は一瞬私を見たが、それっきり。無視された。しかし私を見たとき、アレッと思った。右と左の眼の色がちがうのである。以前、金目と銀目の猫に会ったことがあったが、今日は、金目とブルーの目だった。

見まちがいかと思い、ちょうど傍でその猫にカメラを向けていた男の人に聞いてみた。

「そうですね。金目とブルーの目ですね。珍しいですね」

その人もそう言った。

その男の人は、近所の人ではないらしく、じゃあ、と言って別れたが、珍しいことを共有した。

とうきゅうに行っていた時とは、まったく違った景色で、ライフに行くのもまたよし、である。

忘れられない人

市川茂子

急ぎの仕事をしていたときに、ミシンの糸がなくなり、近くのスーパーに買いに出た。

開店まもない時間だったので、顔見知りの人には会わないだろうと思いながら、冬ごもりの熊が穴から出たような格好で、綿入れの半纏を着たまま飛び出していた。

信号待ちでいらいらしていたら、突然後ろから肩をたたかれて、ふり向くと思いがけない人だったので、まさか今ここで出会うなんてと、びっくり仰天した。

彼女は、もともと歌人・佐藤佐太郎先生の「歩道」で勉強していて、作品を発表しながら活躍していた。私は所属する同人誌「華陽」短歌会で、主宰の藤本大里子（おりこ）先生のもとで、最初から関わってきている。やがて彼女も主宰の知人の紹介で、私より遅れて「華陽」の同人にもなり、まもなく編集部に入って一緒に仕事をするようになった。

「華陽」は主宰の友人や知人などの方々のご縁で、各地から集まって、五十名を超えるほどになり、編集部員も各結社で作品を発表している方々で七名になり、三年、五年ごとに合同歌集を出すなど、

月例歌会や年大会など忙しい日々を過ごしていた。

その途上で主宰が病気で亡くなり、今後のことを協議したところ、編集部の意見で私のところに発行所を移し、責任者となって今まで通りに季刊誌として継続することになった。彼女は経理の仕事をしているので、私と二人三脚で企画・運営を担当し、他の方々も選歌や作歌指導を分担しながら、百号まで続けられた。昔ばなしのような懐かしい思い出になってしまったが、私にとっては忘れられない人になっている。

彼女は若いころから登山が趣味で、ご主人とともに日本の山々は大方登っているようだ。今はときどきは遠出しているが、ご主人と二人で近くを散策して楽しんでいると言う。

住まいはとなりの区で、一声かければいつでも会える。お互いに話が通じるので、疎遠になっているわけではないし、ご無沙汰しているだけだと思っている。

生前に寺山修司が、

「思い出される人よりも、忘れられない人になりたい」

と言ったことを、九條今日子が語っている。先日、寺山修司の元妻・九條今日子の訃報が新聞に出ていた。

年を重ねることで、思い出される人や忘れられない方々はたくさんいる。しかし、時がたつにつれて、こちらが忘れられてしまうだろう。

でも、彼女のことは忘れない。
ご主人と二人で近くまで来たが用事があると言うので手短な話をして、お互いに先を急いでいたので、そのまま別れて帰ってきた。

「清紫会」だより

◆第119回　平成二十六年五月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階B会議室
〈提出作品〉小野澤繁雄・松江（1）／林博子・墓を毀す

◆第120回　六月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・忘れられない人／大石久美・記録漏れ／小野澤繁雄・松江（2）／林博子・あじさい／松井淑子・あるホームレス／丸山弘子・君子蘭

◆第121回　七月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉小野澤繁雄・棕櫚の木／林博子・Nothing to wear／丸山弘子・ブルーの目

（松井）

無二の会短信

◆遠回りしたついでに時々行っていた本屋に立ち寄った。必ず覗く本棚に、外山滋比古先生の本がめずらしく数冊並んでいた。『失敗談』（東京書籍）、『茶ばなし』（展望社）、『国語は好きですか』（大修館書店）、『元気の源　五体の散歩』（詳伝社）、そして『リンゴも人生もキズがあるほど甘くなる』（幻冬舎）の五冊を購入した。どれも先生独自の表題で、なかでも『リンゴ…』は構成も工夫されている。34話があり、タイトルに続く本文の他に、「その心は…」式に先生特有の語り口で大文字の答えが用意してあるので、一気に読んでしまう仕掛けになっている。文京シビックセンターで「清紫会」のエッセイ教室が、先生を囲んで続いていた頃がなつかしい。今でも仲間たちだけで存続していて、スカイレストラン椿山荘での夕食もそのままなのだが、先生の存在がないのが少し淋しい。執筆が粗方済まれたはずなので、もう一度お迎えしたいのだが贅沢だろうか。　池田桂一

◆押し入れの奥に置いたままの、箱やトランクの中を片付けようと思いながら、手付かずにまた一年の半分を越えてしまった。残された時間を考えると、物事を先送りできない。日々の生活が足早に過ぎていってしまう思いを感じている。　市川茂子

◆夏の休み（盆休み）が一週間ということで、米沢に越して一ヵ月の下の子がやってきたが、冷房のない当家の暑さもあるか、泊まりがけで友だちと横浜に出たり、また同じく水上を往復と忙しい。県内に住む上の子は四日間を交代で休むと一日は顔を出したが、下とはすれ違い。一緒に三人で食事もできなかった。こんなことが残念な夏でいいのかな。　小野澤繁雄

◆毎年七月六日の夕方、近くの竹林に出向いて今年竹の一番下の一枝をいただいてくる。正しく言うと失敬してくるのである。今は練馬区が管理している公園なので「住民税納めています」と後ろめたい気持ちを幾分償う。七夕に使う笹竹であり、願い事を五色の紙に五枚書くことにしている。願い事は一家の健康が主で、七夕に祈ると良いと聞いて「短歌が巧くなりますように」が加わったが、それからは、とんと天候に恵まれない。今年は夕食を終えてから外に出てみると、雲の間に星が見えた。ほぼ頭上に一つ星が見え、雲はゆっくり流れている。白内障を治療してから初めての七夕。貴重な一つ星である。二十年近く前に、今立っている位置から〈夏の大三角形〉を見たことがある。大体の見当をつけて見つめていると、少し東よりの雲間に星が見えた。雲があるから決め手になる白鳥座のデネブが見えない。見当をつけるしかない。七夕に星が見えただけでも幸運である。勝手にベガ〈織女星〉とアルタイル（牽牛星）として、今宵の逢瀬を祈った。　河村郁子

◆集中豪雨による土砂災害で今年の夏は、大きな被害が続いている。とりわけ広島市の災害で死亡した人が七十三名、二名はいまだ行方不明である。突発的で局所的な大雨は、全国のどこでも起こり、被害を大きくしているのが最近の特徴である。滋賀の住まいは、宿舎の四階であり、周囲に山

も傾斜地もない。天童市の自宅が気になり、土砂災害予想マップを覗いてみると、危険区域との指定は無い。たまたま妻の実家を調べてみると、予想以上で急傾斜地と土石流「危険区域」となっていた。自然にあふれ、水がいつも池を潤している山すその家だが、災害と隣り合わせの土地であることを初めて知る。妻に聞くと「危険区域」のことや集中豪雨による避難経路など、行政から周知されていないようだ。身を守るためには、何よりも地域や家族の情報と判断で臨むしかないことを強く意識した今日この頃である。

新関伸也

◆今年の私の畑には、害虫のニジュウヤホシテントウが少なく、益虫のテントウムシがたくさんいて思わず顔がほころぶ。友人の梅津純子さんを訪ねたところ、草木がアブラムシにやられて元気がないと困っていた。「それならこれ！」と、翌日テントウムシの成虫と幼虫を小さな箱に入れて届けた。ほどなく、「自然農の友がみやげは我が花の蟻巻食わすと天道虫二匹」はじめ、幾首もの歌でお礼をいただいた。庭を覗きに行ってみると、テントウムシは仲間を呼ぶのか、そこかしこに居着いていた。

新野祐子

◆マンションや事務所ビルが建ち並ぶ山手通りの上空を、しばらく前から数羽の燕（つばめ）が飛び回っている。こんな地域のどこに巣を掛けたのかと不思議に思っていたところ、先日、あるマンション一階の車庫に飛びこむところを見た。のぞいてみると、軒の壁の裏側に走る直径十センチほどの樋の上に巣があり、雛（ひな）が顔を出していた。日本家屋が減り、東京の街から燕は消えたかと思っていたら、しっかりと棲（す）みつく場所を見付けていたようである。野生の逞（たくま）しさに感激した。

松井淑子

◆エッセイのその後のことになるが、なかのとうきゅうから、イトーヨーカ堂に変る様子を見に行った。地下の大部分に幕が張られていて、中の様子はわからない。しかし工事が急ピッチで行われているのはわかる。十月二日が開店だそうだ。郵便局と眼科医は、引きつづき営業していた。もう一軒、シノトメという家庭雑貨の店があり、寄ってみた。客が全然ないわけではないらしいが、とうきゅうに買物に来た客をあてにしていたはずだから、大変だろうなと思った。案の定、うちは被害甚大なんです、早く十月二日が来ればいいな、辛抱辛抱と思っています、と主人のボヤキを聞かされた。

丸山弘子

◆苫小牧にも夏が訪れているようだが、夏の気配はわずかしかない。日中でも涼しい風が吹く。「暑い」と思っても、28度を超えてこない。東京生まれの私はやや物足りない気分だが、体はこちらの方がいいと正直だ。先日、ハルと二人で札幌に行ったらあまりの暑さに驚いた。東京はこれよりも暑いのだろう。私もハルもすっかり苫小牧人になってきている。

山内裕子

◆オンデマンド印刷によって「展景」がふたたび紙の雑誌としても読めるようになった。パソコンの画面で読む「展景」に比べて、やはり落ち着く。文学作品は、ページをくりながら読んだ方が、味わいも深くなると思うのは旧世代かもしれないが、配本もつづけてほしい。

結城　文

編集後記

◆中秋の名月、山形では雲もなく、くっきりと見えた。ほかの地域ではどうだっただろうか。

◆ことしの夏は大雨による災害が多く、当地、山形県でもブドウ畑や水田に大きな被害があった。しかし、八月下旬の広島市の土砂災害は最大のもの。人的被害が大きく、土石流が下ったあとの写真は衝撃的だった。災害の起きた八木地区は「八木蛇落地悪谷（やぎじゃらくじあしだに）」と呼ばれ、その後「八木上楽地（やぎじょうらくじ）芦谷（あしや）」と改名され、さらに現在の八木だけになったという話がある。役所では文献に見当たらないとしているが、伝説として地元の人のあいだで語り継がれてきたのかもしれない。東日本大震災のあと、古文書や古地図で地名を確認する人が増えたように、地名の変遷には注意する必要があるだろう。

◆尾花沢（おばなざわ）市でアーサー・ビナードさんの講演を聴いた。縮めていうと「ことばを正しく使うこと」「間違ったことばにだまされないこと」だろうか。日本語を母語としない人だからこそできる、するどい見方、また、その論理の明解なこと！　ユーモアたっぷりの語り口も手伝って、ほかの誰よりも日本語として胸に響いた。チャンスがあれば一度お聴きになることをおすすめする。

◆東京歌会が再開された。小野澤さんを中心に、座としては東京のメンバーがほとんど。が、詠草だけでも出せるので地方からも参加したい。自分の作品を晒して批評を受けることは、思い込みを避けるためにも必要であり、刺激にもなる。今後もできるだけ続けていってほしいものだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 75号

二〇一四年九月二十七日　発行

編集・発行人　布宮慈子

制作　スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二―一―七―二〇二

info@muninokai.com

Copyright © 2014 MUNINOKAI. All rights reserved.